

社会課題への貢献に向けた学会の役割 —60周年シンポジウムから—  
Role of AES Japan for Contributing to Social Issues -From 60th Anniversary Symposium-

(1) 60周年シンポジウムから

(1) Topics from 60th Anniversary Symposium

\*岡嶋 成晃

日本原子力学会 会長、JAEA

本年（2019年）60周年を迎えた日本原子力学会は、学会設立以来、原子力の平和利用に関する研究開発の振興に寄与するとともに、会員相互の啓発に努めてきた。その中で、2011年3月11日に発生した東京電力福島第一原子力発電所の事故により、我が国の原子力安全に対する信頼は大きく揺らぎ、本会の活動にも大きな影響を与えた。60周年を記念したシンポジウム（2019年4月25日開催）では、この現状を踏まえるとともに、福島復興の推進と原子力の平和利用に対する信頼の回復と新たな発展への展望が示された。ここでは、シンポジウムの概要とシンポジウムの中で実施・回収したアンケート結果を紹介するとともに、社会貢献に向けた学会の役割の観点から、今後10年の『再構築期』に向けた活動の方針を述べる。

**1. 60周年シンポジウムの概要**

シンポジウムは2部で構成され、第1部では、駒野前学会長が、本会の60年を産業界の発展と関連づけて振り返るとともに、震災後の福島復興と廃炉推進に対する本会の取り組みの現状を報告し、次の10年を「再構築期」として本会が取り組むべき課題を提言した。続いて、特別講演（2件）があり、立命館大学の開沼氏は福島復興の現状と今後の課題について、ノンフィクション作家の山根氏は福島の企業が廃炉推進に取り組む現場について動画を交えて復興に前向きに取り組む姿勢を紹介した。第2部では、エネルギー源としての原子力の展望について2件の講演があり、エネルギーセキュリティと環境問題を踏まえた原子力の役割に関する原子力アゴラ調査専門委員会の提言、また福島第一事故の原点に立ち返り社会的な信頼回復を実現する将来炉研究への学会のあり方の講演があった。さらにエネルギー利用に限らない6件の若手研究者を中心とした講演があり、バックエンド技術、放射線治療、量子素子開発、中性子イメージング技術、低線量率被ばく影響研究および宇宙探査機器の原子力電池開発に関する最前線の研究紹介がされた。

**2. シンポジウムアンケートについて**

アンケート回答の年齢分布はほぼ正会員の年齢分布と一致し、51歳以上からの回答が7割を占めた。シンポジウム構成についておおよそ好評を得たが、学会活動への要望として若手会員の増加推進（新しい研究分野の提示、学生会員への対応）および社会・国民への学会活動の積極的な公開と意見交換（対外発信が見えにくい、他分野との交流が無いように見える）等の意見を多く頂いた。

これらの意見は相互に関係していると考えられ、学会が原子力分野の最新の研究成果および廃炉への寄与を積極的に、社会的にも認められ魅力あるものとして発信することが若手研究者の意欲および会員増加に繋がるものと考えられる。

**3. 社会課題への貢献に向けて**

60周年シンポジウムで示された「今後10年の『再構築期』」に向けて、①専門家の立場からの提言と理解活動の促進、②1F廃炉の促進と福島復興への支援、③放射線利用・放射線防護の研究の促進、④教育・人材育成の継続と技術伝承等に取り組むことによって、国連の持続可能な開発目標（Sustainable Development Goals：SDGs）へ貢献していこうと考える。

---

\*Shigeaki Okajima

President of Atomic Energy Society of Japan, Japan Atomic Energy Agency